



*今月の花
ヒヤシンス

前へ！
未解決
朝鮮女子勤労
挺身隊問題

3月14日、名古屋三菱・朝鮮女子勤労挺身隊訴訟を支援する会も参加する「強制動員問題解決と過去清算のための共同行動」（連絡先＝東京）が外務省要請行動を行った。外務省からはアジア大洋州局北東アジア第一課企画官 北川伸太郎氏が対応した。「共同行動」側が提出した要請書は下記の通り。

2023年3月14日

外務大臣 林 芳正 様

強制動員問題の解決に向けての要請
強制動員問題解決と過去清算のための共同行動

日韓関係の改善に向けての大臣のご努力に敬意を表します。

3月6日、韓国政府・朴振外交部長官が、「徴用工」問題の「解決策」を発表しました。その内容は、①「日帝強制動員被害者支援財団」が大法院判決を受けた原告に賠償金相当額を支払う、②後続措置として被害者の苦痛を記憶し、継承していくための事業を推進する、③賠償金相当額の支払いの財源は民間の自発的寄与などで用意する、というものでした。

この発表を受けて日本政府・林芳正外相は記者会見で以下のことを表明されました。それは、①韓国政府の「解決策」を「日韓関係を健全な関係に戻すためのものとして評価する」、②「この機会に、日本政府は、1998年10月に発表された『日韓共同宣言』を含め、歴史認識に関する歴代内閣の立場を全体として引き継いでいることを確認する」の2点でした。これで日本政府は韓国政府が求めた「誠意ある呼応」に回答したと言えるでしょうか。

これでは強制動員問題が解決したとは言えません。第1に、被告企業（三菱重工、日本製鉄）は謝罪もしていなければ、賠償支払いの表明もしていません。大法院判決で賠償命令を受けた加害当事者としてあまりに無責任です。被害者は納得しません。韓国の世論調査でも、59%が「日本の謝罪と賠償がなく、反対する」と回答しています。

第2に、林外相の「歴史認識に関する歴代内閣の立場を全体として引き継いでいる」との発言は、強制動員被害者に対してなされていません。1995年村山総理談話、1998年日韓共同宣言、2002年ピョンヤン宣言、2010年菅総理談話では、いずれも日本の朝鮮植民地支配が「韓国国民（朝鮮の人々）に多大の損害と苦痛を与えた」事実を認め、「痛切な反省と心からのお詫び」を表明しています。今回、韓国政府が「徴用工」問題の「解決策」を表明したことに対し応答するのであれば、「多大の損害と苦痛」を受けた当の被害者に宛てて謝罪するのが筋です。同世論調査で、日本政府の歴史認識に対する質問に「反省している」と答えた人は僅かに8%で、「そうではない」が85%に上ったのも当然です。

日本のメディアですら今回の韓国政府の「解決策」の表明と、それに対する日本政府の対応を、政府間の「政治決着」ではあるが、「当事者間の問題を解決するものではありません」と評価しています。解決に至るか否かは、今後の日本政府、被告企業の対応にかかっているのです。

16日から尹錫悦大統領が来日し、12年ぶりに日本で日韓首脳会談が開催されます。この期に当たって、私たちは強制動員問題の解決に向けて、日本政府に下記のことを要請します。

記

- 1 強制動員被害者に対し、岸田首相が直接に謝罪を表明する
- 2 被告企業の三菱重工、日本製鉄に対し自主的に被害者に謝罪、賠償（相当額の「財団」への拠出など）を行うよう促す

上記の2点を、日韓首脳会談の際に岸田首相が尹大統領に伝えるよう要請します。

【この件の連絡先】【略】

75周年

今も消えない傷痕

「濟州道四・三事件」

朴天守さんの実体験を中心に

文光喜

愛知朝鮮学園理事長

いう。

解放後の朴さん

愛知県には朝鮮で生まれた在日一世の教育者、朴天守さん（写真）がご健在である。解放後の歴史を語る数少ない最後の生き証人の一人である。朴さんは一九三二年一月二十五日（蛇年だと三〇年）濟州道安徳面西広里で父朴時松氏と母尹斗三氏の六人兄弟の三男として生まれた。

解放前、苦しい中でも両親は安徳区国民学校へ通わせてくれた。卒業して生活苦のため、家業である牛の世話をしているとき、結核にかかり死にかけたことがあった。オモ二（母親）が全羅南道新泰院にある金山寺に行き、山羊の肉など漢方薬で病気を治してくれたことが今も記憶に新しいと

一九四五年、祖国の解放を三歳で迎え、大きな希望を抱き、ソウルへ行った朴さん。ソウルの街は、『中央日報』社長であった呂運亨氏（四七年七月テロにより犠牲）を中心に朝鮮建国準備委員会が組織され、全国に広がり各道の人民委員会が地方自治機関の役割を果たそうとしていた。しかし九月、南朝鮮に進駐してきた米軍は李承晩を始め親日派勢力と結びつき、人民委員会を弾圧し統治しようとしていた。強硬な反共主義者ホッジ中将は「三八度線以南における朝鮮の唯一の

政府はアメリカ軍政庁」として、親日派を中枢に入れ込み、旧警察を復活させた。当時、朴さんは仁川市富平洞の親戚の家で『東亜日報』支局の新聞配達をしながら細々と勉強していた。

一九四七年徴兵の呼び出しで濟州島に強制送還され、永登浦へ帰ってきた。島は米軍政の下、単独選挙を行うため人民委員会が解散され、パルチザン狩りが行われていた。故郷の暮実浦の家屋は燃やされて、辺益鐘義兄がパルチザンだという理由で明生姉が「西北青年団」により、銃殺された事実を知らされたのもその時だという。その現場は火薬の匂いが今も残っているようであったと記憶して

いる。

「四・三事件」の発端

濟州島では、一九四七年三月一日、独立運動の二八周年記念日を祝い、自主独立国家の樹立を訴える民衆が立ち上がることに対し、警察は発砲して六名が死亡する事件が起きた。この事件を機に島民は警察と右翼青年団との対立が激化し、五月一〇日の単独選挙に反対して、警察や右翼青年団の宿舎を襲撃する一斉蜂起が起きた。

米軍はそれを理由に警察・右翼青年団を動員して過酷な「焦土化作戦」を展開し、集中的な殺戮が行われたのである。これが「濟州四・三事件」の発端である。当時三十万人いた濟州島民の八万人が銃殺されたという。

一九四九年に、武装遊撃隊は壊滅状態になったにも関わらず、五三年に特殊部隊が投入され残余勢力を根

こそぎにして、五四年に幕を下ろしたという。

反共主義が長く続いた韓国では、「四・三事件」はタブー視され、その関連性が明らかにされると就職や結婚にも響き、日本では入管法にも引つかかる恐れがある。島民は一切口を閉ざした。

独裁政権が終わった韓国で、一九八七年民主化が実現してから、徐々に解明され閉ざされていた人々の重口が開き始めたのである。済州道議会の調査では一万五千名の犠牲者の実名が示され、犠牲者は三万人、八万人いるがまだ全容が解明されていない。



渡日した朴さん

朴さんは身の危険を感じ釜山から漁船で十数名の人と一緒に日本の博多に渡った。日本に着き案内人と日本語も知らないのに新聞紙を広げて二四時間程かけて、夜行列車で東京へ行った。三河島にいたお兄さんを頼って単身日本に来たのである。昼間は兄が工場長をしていた三笠ゴム工場を働いたが、朝鮮戦争が勃発してから倒産した。その後、タクシードライバーや兄の養豚業を手伝いながら、駿台高等学校を終え、早稲田大学の文学部教育学科に入学して一生懸命、勉強に励んだ。当時、日本で

は平壤に在住している在朝日本人の帰国運動が起り、日本からも東京朝鮮中高級学校の学生十余名と同胞二十余名が帰国していた。

朴さんも生活苦や進学路の不安から、平壤師範大学から転学証明書を取り寄せてもらったが、帰国の夢は実現しなかった。在学中の一九五七年、信濃町にあった朝鮮総聯中央本部の李珍圭教育部長（のち副議長）に呼び出され、一緒に勉強していた友人たちと共に四日市の朝鮮学校への英語教員の赴任指令が下った。早稲田大学の卒業証書はもらいたかったが、学費も延滞していたので、指示に従って教壇に立つことに決めたという。

それから約四〇年間、朴さんは三重県、愛知県を主に朝鮮学校の教師や教育分野で活動した。四日市朝鮮初中級学校に通う頃、同僚の曹淳子氏（後に南淑）と結婚し、二女を授かった。曹さんは四〇年間朴さんを

支えながら、民族教育の現場で生涯を捧げ三年前、他界された。朴さんは愛知朝鮮第五初級学校と第六初級学校が統合し、東春初級学校になる在任中、急遽、職責を解かれ奨学部長になったときは悔しい思いをしたという。

日本の文部科学省は、朝鮮学校の教員に対し出身とか過去の経歴まで干渉して、強制的に学校から降ろしたのである。それからは教育の現場から離れ、中村支部や名東支部の宣伝部長や委員長を歴任し、本部の教育部長や人権協会等の権利擁護分野で活動して、民族教育発展のために努力したことが思い出される。活動六〇年の歴史は何の後悔もなく全身全霊、祖国と民族教育のために尽くす充実した人生であったとする朴さんである。

「四・三事件」の解明へ

朴さんが、引退し悠々自

適な隠居生活を送っているとき、突然二〇二〇年春、韓国から『濟州四・三事件真相究明及び犠牲者名誉回復実務委員会委員長』の名義で、「濟州四・三事件犠牲者および遺族追加申告の受付案内」（写真）を届ける二名の方が家へ訪ねて来たのである。

韓国政府の補償金を支給したいがために、虐殺された朴明生姉の実情を知りたくて証言を集めているという。韓国では、二〇〇四年に真相究明特別法が制定され、「濟州四・三事件」の歴史見直しが続き、その事実を知っている人が少なくなつたので、生き証人である朴さんの証言集めが行われたのである。

朴さんは親が残した六〇坪の畑ではチエス（弟嫁）がミカンや豆、麦を耕し生活の糧にしている。朴さんは朝鮮籍なので、国民登録戸籍から除籍され、相続権もすべて放棄させられたので、困窮のまま何も残って

いないという。まさしく、「四・三事件」は朴さんだけではなく、分断国家樹立の危機迫る濟州道で、東アジア現代史最大の悲劇の一つである。実に日本だけではなく、韓国でも「四・三」で受けたトラウマ（心的外傷）によって、口を閉ざした人が多かった。八七年以降、金石範の「火山島」文芸作品（第一回濟州四・三平和賞受賞）や梁石日の「大いなる道を求めて」だけではなく、研究論文などによる真相究明が進み、八九年には最初の慰霊祭が開催され、九三年には濟州道議会議が四・三特別委員会を設置して犠牲者の調査を開始させた。

「四・三事件」は、単に同族の争いではなく、米国の軍政の下で植民地統治に協力した親日派を南北分断の単独選挙に加勢させたところから深刻さが出たのである。事件は、八万名の犠牲者を出したにも関わらず、冷戦の影響で被害者に

沈黙を強い孤立化させることで、隣人の悲痛な体験を知る機会を韓国だけではなく日本でも奪っていた。それは、日本政府が韓国の独裁政権を終始一貫支えることとで一九六五年の日韓条約に繋がり、その真実を塞いできたのに表れている。これは今日まで、日本社会が「従軍慰安婦問題」や「徴用工」などの戦後補償問題への態度を曖昧にして、アジア民衆の受難に対する歴史的想像力を欠如させていることにも繋がっているといえる。それゆえに、在日の濟州島出身者の中には「四・三」前後の白色テロを避けて日本に渡航してきた人々が七〇余年間も沈黙を守り、傷痕が根深く残ってきたのである。

おわりに

その悲劇は植民地支配の残滓が加担することによって引き起こされた四・二四阪神教育闘争にも連綿とつながっているように思わ

れる。それは、この二つの事件が場所は違っても、米軍の軍政の下で同じ時期に起きていたことを想起することから、在日社会全体に深刻な影を落としていたといえる。

日本においてはマジョリティがマイノリティを抑圧し、高校無償化差別やヘイトクライムなど、在日コリアンの子弟たちの学びの機会を奪う機会がいまだに残っている。このような危険が整然と行われる日本社会に対して警笛を鳴らし続けているカナリヤは在日コリアンであることを忘れてはならないと思われる。

（二〇二三年三月八日）

【参考資料】

金石範『火山島』文藝春秋一九八三〜九七年

梁石日『大いなる時を求めて』幻冬舎二〇一二年

中塚明『日本と韓国・朝鮮の歴史』高文研二〇二二年

その悲劇は植民地支配の残滓が加担することによって引き起こされた四・二四阪神教育闘争にも連綿とつながっているように思わ

鑑賞のおすすめ



【その 83】

韓国映画

『国家が破産する日』
(2019年)

監督：チェ・グクヒ

伊藤 一郎

(koreamovieculture@yahoo.co.jp)

朝鮮文化を知る会



「合法的な犯罪者」を描く
破壊される中小零細
企業もリアルに

映画『国家が破産する日』は二〇一九年に韓国で公開された。映画は約二〇年前に韓国で起こった通貨危機(注1)を題材としている。主人公のハン・シヒョンを、キム・ヘスが熱演している。映画のあらすじは以下のとおり。

映画の舞台は一九九七年の韓国。韓国は前年に、悲願の「先進国クラブ」OECD(注2)への加盟をはたし、経済成長を遂げていた。そして国民の大部分が自らを中間層と捉えていた。だれもがこれからも好景が続くと信じ、悲劇的な将来を予想もしていなかった。

しかしその間も、国家破産の危機は確実に、静かに迫っていた。韓国銀行の通貨政策チーム長のハン・シヒョンは以前より、将来を楽観視する時代にも危機の前兆を察知し警鐘を鳴らしてきた。しかし彼女の言葉を真に受けるものはなかった。そんな中、国家破産まで残された時間は七日間という現実、突然韓国銀行、政府の職員は直面するこ

とになる。

政府の対応は遅れ、迫り来る危機を一向に公表しない。それどころか、ハン・シヒョンの意見は無視される。同じ頃、大手金融会社の幹部のユン・ジョンハクも、国家の危機の前兆をつかんでいた。

そしてユン・ジョンハクは逆に、この危機をまたとない金儲けのチャンスと捉えていた。早々に金融会社を辞職したユン・ジョンハクは、これまでの顧客を集めて投資を呼びかける。そんな混乱した状況のなか、町工場を経営するガプスは大手百貨店からの大量の受注を約束手形で引き受けてしまう。国家破産の危機が迫っていることは知る由もない。結局大手百貨店から受け取った手形は不渡となり、ガプスは自らが支払うべき業者への代金支払いのあてがなくなる。それは地獄への始まりであった。

危機がさらに進展して韓国社会が混乱する中、政府は国際通貨基金(IMF)に頼ろうとする。支援交渉とは名ばかりで、IMFが韓国に突き

つけた条件は、到底受け入れることができない過酷なものであった。

交渉がおこなわれたホテルには、なぜか米国の財務省の幹部が極秘で宿泊し、交渉の黒幕の役割を果たしていた。それは新たな韓国の苦難のはじまりであった。

本作品をみていて、さまざまに思いが交差した。筆者はIMF危機の前後に韓国を訪問し、当時大きな衝撃を受けた。高校時代の韓国の受験競争を勝ち抜いて名門の大学を卒業し、誰もが知る有名企業の幹部をして順風満帆だったある韓国人は、IMF危機の後に再びソウルで会った際に企業を事実上解雇されていた。

そしてしかたなく零細企業を立ち上げる準備をしていた。その後、彼からの連絡は長く途絶えている。当時のソウルの各所にはIMF時代の克服を呼びかける横断幕が貼られており、悲壮な雰囲気漂わせていた。一九九七年の冬、ソウルの街中では大統領選挙にあたり、多くの市民が

「2番」への投票を呼びかけた。その後、元民主化運動家を自称した大統領が当選した。その後、IMF危機のど

さくさの中で、新しく就任した大統領は非正規雇用を増やす雇用破壊政策を推進した。

民主化運動を率いたとされる大統領は、自らの出身地域の閣僚や優遇するとともに、

労働者、民衆の生活を破壊し、命を奪う新自由主義政策をその後も積極的に導入し続けた。それまでの自身の「イメージ」とは裏腹に、親族たちの不正資金容疑も相次いだ。ソウル駅など主要駅には、外資のATMが溢れ、韓国の大手の銀行の多くに外資が投入された。

映画に描かれる政府の職員と財閥の経営者らの醜態は目を背けるばかりである。IMFの危機を知っていた政府の役人と友達関係の財閥関係者のみが危機を逃れ、多くの中小零細企業の経営者らは切り捨てられていく。映画は政府によって生活を破壊された中小零細企業の生活をリアルに描き出す。それぞれの人々が

かけがえのない家族、家庭を持つ存在であるにもかかわらず、人々をモノのように捨てる者ら。いうまでもなく、これら「合法的な犯罪者ら」に対して相応な罪の償いをさせない限り、今後の韓国の人々の人間らしい生活はあり得ないであろう。

(注1)一九九七年の通貨危機。当時韓国政府は、外貨の急速な流出に直面していた。そして一九九七年十一月二日、韓国政府は国際通貨基金(IMF)に緊急融資を申請した。その後、総合金融会社がすべて営業停止となり、金融システムは麻痺した。中小零細企業、そして大企業ですら倒産が相次いだ。

(注2)経済協力開発機構(OECD)は、米国のマーシャル・プランの受容機関として一九四八年に設立された欧州経済協力機構(Organisation for European Economic Cooperation: OECD)を前身とする。OECD設立条約には、「経済成長」、「途上国援助」、「多角的な自由貿易の拡大」が主要目的として明記されている。



『日本と朝鮮(愛知版)』を日・韓・朝 市民が往き来する 紙上交差点に!

★ご投稿のおすすすめ

話題、証言、時評、書評、資料・記録の紹介。日韓・日朝関係についての提案・意見。身近にある諸交流の企画・情報を、歓迎します。文章でも写真でも結構です。取材を依頼される場合はその旨お知らせ下さい。

★購読のおすすすめ 『日本と朝鮮(愛知版)』の購読をおすすすめます。郵送します。購読料二年間3,000円。(郵送料含む)

★日朝協会入会のおすすすめ 会費二年間6,000円。
(『日本と朝鮮[本部版]』と『日本と朝鮮[愛知版]』の購読料を含みます)

歴史の心

第2講 白村江の歴史的悲劇

金 宗 盛

(社協東海支部会長)

申采浩(一八八〇〜一九三六)の『朝鮮上古史』に白村江の戦いの記述がある。

「蘇定方が白江に至ると風雨が乱れ、行軍がかなわず、巫者に問うと、『江龍が百済を守護している』と告げたので、定方が白馬を献じる。白江はすなわち白馬江の別名がある。日本史に白村江と称するが、村の意が馬なれば、白村江はすなわち白馬江の別訳なり」。申采浩は李氏朝鮮末の民族主義者、朝鮮史研究者である。

さて、白村江の戦いとは、一言で言えば、東アジアの大戦争の結果、朝鮮史が大陸国家から半島国家に転落する、哀れ「朝鮮史」の悲しき歴史のプロローグであった。

それは、東アジア秩序の、唐中心の朝貢秩序の再編を促した戦争であった。では、白村江の戦前と戦後を概観する。

朝鮮は高句麗・百済・新羅の三国時代であった。

高句麗と百済は盟友となり、倭国とは良好な関係を持っていた。高句麗は唐の侵攻を三

度退け、百済と共に新羅を圧迫していた。高句麗は実に、隋と唐との六十年の長い戦争に勝ち抜いていた。

新羅は、存亡の危機にあつて、一つの選択をした。唐と組み、同族国家を攻める民族的誤りを犯した。六六〇年、唐と連合して百済を陸と海から攻め、これを亡ぼす。百済の滅亡を受けて、百済復興の戦いに、倭国が援兵を出す。これが白村江の戦いである。

倭国は、百済の求めに呼応し、国家存亡の命運をかけ、約五万の軍を送り、唐軍との海戦にのぞんだ。六六三年、倭軍は全滅する。

中大兄皇子(天智天皇)は新羅・唐の連合軍による倭国への進攻に備えて、都を近江に移し、百済式山城を築き、これに備えた。

白村江の戦後、唐軍は新羅をも支配下に置こうとしたので、新羅は高句麗・百済の遺民の力をも借りて、唐を半島から追い出す。

日本への唐・新羅軍の進攻の状況に至らなかつたことは、倭にとって幸運であった。



※ ※ ※
日本史高校教科書には「東アジア大戦争」を正面から記述しない。

【白村江】・・・「日本にも①救援を求めてきたので朝廷は百済に軍を送った。しかし六六三年、白村江の戦いで唐軍に敗れ、②朝鮮半島での日本の地位はまったく失われた」。中大兄皇子は ③新羅や唐の攻撃に備えて、太宰府に水城と山城を築き、対馬と

筑紫に防人をおいた」。

・「中大兄皇子と大海人皇子のあいだに皇位をめぐる争いがおこり」④乱は大海人皇子側の勝利におわった」

【遣唐使】・「白村江の敗戦のあと、天智天皇のときから三〇年あまり ⑤遣唐使は中断されていたが、七〇二年に復活した」

【亡命者】・「一方、七世紀の百済・高句麗の滅亡により、朝鮮半島から多くの亡命者がわが国に帰化した。そのうち⑥王族・貴族は八世紀の政界で活躍し、農民はおもに東国の開発に従った。⑤新羅とこれを朝貢国として位置づけようとする日本の間でしばしば衝突が起こった」。

・「渤海は唐・新羅と對抗する必要上 ⑥日本に朝貢し、北方の毛皮などをもたらした」。

①②③④⑤⑥は、まるで七支刀的手法で語っている。『七支刀』は教科書から消し去られたが、新羅・唐・高句麗・百済・倭の東アジア大戦争は消しに消されず、『日本書紀』の歴史観の中にとじこもる。

東アジア大戦争の史実に面を背ける。

高句麗の滅亡は朝鮮が強大国家から半島国家への大転落の一步となった。よって、高句麗・百済の一大事に国の命運をかたむける援軍を送り、大敗した日本国の危機は相当に深刻であった。

高校日本史は、史実を遠く離れた記述に終始している。『百済七支刀』の下賜を「献上」とするメロデーを変えることなく、ちぐはぐな記述にとらわれている。

筆者は①②③④⑤⑥を解説することは省くことにする。生き残りをはかる国内外の努力が日本の史実であったと考える。

※ ※ ※

「白村江の戦い」三様
『三国史記』倭国の船兵が来たり、百済をたすく。倭の船一〇〇〇艘はとどまって白沙に在り。

『旧唐書』倭兵にあり、白江の河口において血戦してみな捷つ。その舟四〇〇艘を焚き、煙焔は天に〇り、海水はみな赤く、賊衆は大いに潰ゆ。

『日本書紀』大唐はすなわち左右より船をはさんでからみ戦う。ときのまに官軍やぶれぬ。水に溺死する者おおし。朴市秦田来津は天を仰いで・戦死する。

※ ※ ※

鬼室神社（滋賀県蒲生郡日野町小野）を参観した。百済滅亡後、日本に亡命した鬼室集斯の墓碑が石祠に祀られている。筆者は時空をこえて、深く頭を下げた。集斯の父、副信將軍は忠清南道扶餘郡に祀られている。



「日本書紀」によると天智（十年）によって小錦下を以て鬼室集斯に授く、とある（今の文科大臣に相当）。

たまたま出会った鬼室集斯研究者に、「よく、保存されましたね」と問うたところ、

「天皇への『忠誠心』を後世へ伝えるものだった」とのこと。他日、韓国の民主化運動で死刑を言いわたれていた人物の感想に、「白村江の亡命人が祀られているとは！」と絶句していた。ちなみに、

鬼室副信・集斯の名は、『朝鮮歴史人名辞典』（ピョンヤン 二〇〇二年）には無い。

※ ※ ※

朝鮮にとって、「白村江の戦い」は、国内の統一戦争（国内の平定）に外国の軍勢を引き入れた民族の背信である。よって、韓国史が未だに、「新羅による国土の統一」との歴史認識を批判する。

高句麗の滅亡後に、高句麗の遺民たちにより、渤海（始祖王・大祚榮）が立ったことよって、新羅・渤海時代と新しく呼ぶ。すなわち、「統一新羅」との時代認識を否定する。よって、韓国史・日本史の「統一新羅」を「後期新羅」と主張する。

ともあれ、新羅の「朝鮮史」に対する背信をなじる。『朝鮮通史』（上・朝鮮民主主義人民共和国）は、「高

三つの追悼碑

愛知県の朝鮮人強制労働の歴史と継承運動

坪井 祐介（韓国・江原大学学生）

句麗と百済の王朝滅亡後、
・十年間の苛烈な戦争による人的・物的損失は莫大なものであった。それは新羅支配階級が唐の侵略勢力を引き入れた罪悪的行為の結果であった。

『朝鮮歴史人物辞典』（科学百科辞典・二〇〇二）による金庾信（五九五〜六七三）の評記を見る。

・前期新羅の将。伽耶王の末。新羅の花郎になる。金春秋を救い出すため、六四二

年高句麗を攻める。六六〇年新羅の最高の位階につく。『民族内部問題を唐の力を借りて解決する執権階層の政策をすすめる魁首の役割をした』とある。

『日本史』において、勝海

舟が、いわゆる官軍に対して、フランスの軍事支援の申し入れを拒絶したのは、『日本史』の幸いであったと想われる。

白江、白馬江、白村江は現在の錦江（クムガン）である。

立されるには、そこに関わった人々の運動があり、また歴史が目に見える形として残されることは次の世代に継承する上で大きな意味を持つからである。

まず対象としたのは、愛知県名古屋市の日泰寺にある「冤死同胞慰霊碑」である。こちらの碑は朝鮮解放直後の一九四八年に、強制動員の被害などによって犠牲となった同胞を慰霊するために在日朝鮮人の民族団体によって建立された。「冤死」という言葉には朝鮮独特の死生観が込められている。

つづいては、愛知県名古屋市にある「東南海地震犠牲者追悼記念碑」である。これは三菱重工名古屋航空機製作所道徳工場で働き地震の被害で犠牲となった人々を慰霊するもので、この工場に動員されて地震で犠牲となった六名の

先週三月六日に韓国政府は、戦時中の日本企業による強制動員被害者に対する訴訟判決金について、韓国の財団が肩代わりする方針を発表した。

日本企業の賠償、謝罪は一切なく、植民地支配下で行われた日本政府、企業による戦争犯罪の責任を全く問わないものであった。これに対しては韓国の被害者や遺族、市民からも大きな反発があり、解決案を発表した尹錫悦政権に対する怒りも高まっている。

筆者は現在留学で韓国に来ており、三月十一日土曜日にソウルで行われたデモを直接見ることができたが、集まった市民からは強制動員問題を人権問題ではなく、外交カードとして利用する日韓両政府への反発が強まっている様子が見受けられた。

筆者は愛知県立大学在学時に卒業研究として愛知県の朝鮮人強制連行、強制労働の問題が今の地域社会でどのようになっているのかを研究し、「愛知県の朝鮮人強制労働」というタイトルで卒業論文を執筆した。現在ニュースでも取り上げられている強制動員問題、「徴用工」問題はしばしば日韓政府の外交問題のように捉えられがちであるが、今回の筆者の拙文が朝鮮人強制動員の歴史を身近な地域社会に関わる問題として改めて確認する機会となれば幸いである。

愛知県における市民の歴史継承の運動を研究するにあたって、愛知県にある3つの追悼碑に着目した。追悼碑が建

朝鮮人の名前も刻まれている（なお、道徳工場に動員された被害者の一人が、三菱重工に対する裁判の原告で現在も精力的に活動する梁錦徳さんである）。この歴史を掘り起こした高橋信氏ら教員や市民の運動の結果、追悼碑が建立されることとなった。

そして、三つ目は愛知県半田市にある「平和祈念碑」である。こちらは愛知県の中島飛行機半田製作所で犠牲となった人々を慰霊するもので、朝鮮人犠牲者の名前が刻まれている。空襲の歴史の真相を明らかにした佐藤明夫氏ら教員や市民によって建立された。



上から、
 ○慰死同胞慰霊碑（名古屋・日泰寺）
 ○東南海地震犠牲者追悼記念碑（名古屋・ふれあい病院）
 ○「平和祈念碑」（半田）

り巻く運動について調査を行った。ここから調査結果を踏まえた考察を述べていきたい。

まず、着目したのは継承運動を行う主体である。運動に関わる組織や人々の認識や思いに焦点を当てつつ分析を行った。本研究で調査を行った三つの事例のうち、主に在日朝鮮人が中心となって運動が始まり、それを継続させていたのが冤死同胞慰霊碑をとりまく運動であった。冤死同胞慰霊碑は日本の敗戦直後の一九四八年に建立されたことから、植民地時代を実際に経験している人々によって運動がはじまった事例である。朝鮮人の解放直後だったからこそ、朝鮮人が愛知県で犠牲となっ

たという歴史を残し、同胞の犠牲者を慰霊したいという朝鮮人らの強い思いがあったと言えらる。現在も在日朝鮮人の民族団体である朝鮮総聯が慰霊祭を主催し、朝鮮学校の学生が慰霊祭で舞踊を披露するなど、在日朝鮮人が運動の中心にいつづけていたことが分かる。

朝鮮人が自らの先祖の歴史と向き合い、民族の歴史として継承するという側面が強いと言える。一方で、運動は単に朝鮮人の中だけで完結することはなく、加害者の立場である日本人も運動に参画していくこととなる。小出裕氏のように追悼行事に関わる人や、アリアンプロジェクトのように慰霊祭で朝鮮の歌を披

露する人が出てくるなど、地域の運動としての広がりを見せた。小出氏のように加害者側の立場で日本の歴史を批判的に捉えていた日本人が関わる姿は、碑が目指した「明るい未来をともし歩まんとする朝鮮人と日本人」の姿を体現したものであると言えるのではないか。

一方で、名古屋市南区の東南海地震犠牲者追悼記念碑と半田市の平和祈念碑の二つの事例においては、地域の教員が最初に歴史的事実の調査を始めるなど、日本人が継承運動の中心にいた。また、そうした人々の認識の根幹には加害国の市民としての責任感があることが分かった。高橋信氏は最初に勤労挺身隊被害の事実を知った加害国市民としての責任を感じたことが、継承運動や裁判支援などの活動を行っていく上での原点であった。佐藤明夫氏も空襲の歴史に関する聞き取り活動の中で朝鮮人のことを必ず触れるようにするなど、加害の歴史を明らかにしていくことを運動における最優先課題としていた。

こうした歴史を直視しようとする姿勢は、両者がそれぞれ

れ関わった碑の碑文や説明板からも読み取ることができ。例えば、東南海地震犠牲者追悼記念碑と平和祈念碑にはどちらも「強制連行」の文字とともに朝鮮から人々が連行されて働かされたことが明記されている。また、犠牲になつた朝鮮人の名前が碑に全刻まれていた。こうした具体性を伴った情報は、強制労働が実際にこれらの地域で行われた事実であることを、碑を訪れた人に強く訴えかけることを可能にすると言える。

そして、そのような継承運動は被害者側である朝鮮民主主義人民共和国や韓国の人々との交流や連帯を伴うものであつた。三菱重工名古屋航空機製作所道徳工場に動員された朝鮮人の歴史をめぐってはその後被害者が三菱重工工業を提訴したが、その裁判を支える運動が高橋氏ら日本人々によって行われた。

半田においても国交がないという難しい状況の中で朝鮮民主主義人民共和国との交流を模索し、朝鮮民主主義人民共和国に住む強制労働の体験者の話を書籍にしたり、半田の朝鮮人について書かれた書籍を寄贈したりといった交流

がなされてきた。また、現在は直接訪問することが難しい朝鮮民主主義人民共和国にいる遺族に代わって、毎月碑に献花を行っている人もいた。国境を越えた運動は近年でも継続して行われており、東南海地震犠牲者追悼記念碑と平和祈念碑では、韓国から来た高校生との交流事業が行われていた。

続いて分析を行ったのは三つの追悼碑とそれを取り巻く運動の共通点である。三つの碑それぞれにおいて、犠牲となつた朝鮮人全員分の氏名が刻まれた碑が置かれていることが分かった。これは、「朝鮮人の悲劇の歴史」として犠牲者を一括りにするのではなく、犠牲者一人ひとりを個人として尊重する姿勢が見取れる。冤死同胞慰霊碑においては朝鮮名が判明した場合に新たに名前を刻み直すなど、個人の氏名をより正確に記録することを重視していると言える。これらの傾向は、愛知県継承運動が被害者を中心にして置く姿勢をとっていることの表れだと言えるのではないだろうか。

また、三つの事例すべてにおいて現在まで継続して碑の前で慰霊祭が行われていた。碑をただ建立するだけでなく、慰霊祭を毎年行っていくことは歴史の風化を防ぐことにつながる。慰霊祭という形以外にも、韓国と日本の高生との交流など、人々が碑の前に集まるようなイベントも各事例で確認できた。愛知県の継承運動は、碑という歴史を記録するものを形として残した上で、これを媒介とした交流やイベントを継続的に行っていくことで歴史を残そうとしてきたという特徴があると言える。

最後に全体の調査結果を踏まえた上で、地域の組織・人々による運動が社会に対してもたらす影響について考察していきたい。

愛知県で継承運動に関わってきた市民は加害者としての立場に自覚的であつた。そのような人々が歴史を記録し、後世に伝えていく活動を行うことは、自分が住んでいる国や地域でかつて加害行為が行われた事実を地域社会に思い起こさせ、加害者側としての立場性を喚起させる効果を持つと言えらる。半田においては、歴史の聞き取りの際に朝鮮人の存在を聞くことを共通テ

マとしており、また、空襲の歴史をテーマにした演劇でも加害者の存在が必ず加えられた。これは地域の人々に加害の記憶を想起、想像させる効果をもたらしと言えらる。また、継承を行う人々は単に碑を建てるだけでなく、碑の前で毎年慰霊祭を行ったり、地域の学校に戦争時の歴史を記録した本を寄贈したりと、様々な方法を用いて活動し、それがより幅広く地域の人々が加害の歴史を知る機会となつた。これは、植民地支配や侵略の歴史に対する人々の認識を、市民レベルの運動で変革できる可能性があることを示唆していると言えるのではないだろうか。

朝鮮人強制動員については日本政府、企業からの謝罪、賠償が不可欠であるが、それと同時に強制動員の歴史を私たちがすぐ近くにある歴史として捉えなおし、市民レベルで上記のような次世代に記憶・継承していく運動を行っていくことが重要である。それが、未だ成し遂げられていない強制動員問題の「真の解決」に少し近づいていくのではないだろうか。

国際社会が正確に評価するように朝鮮半島の情勢がこんにちの域に至るようになった原因は、米国がわが国家が取った肯定的措置に呼応するのを拒絶し、かえって対朝鮮圧迫と武力による威嚇を引き続き強化したところにある。

今年だけでもわれわれは、数回にわたって主権国家の「政権の終焉」のような非現実的で極めて危険な目標を設定し、各種の威嚇的な修辞学的表現まで動員して地域情勢を悪化させている米国とかいらいの頻繁な連合訓練こそ、朝鮮半島で情勢の悪循環を持続させる原因であるということについて明白にしたし、朝鮮半島と地域の平和と安定を害する軍事的敵対行為を直ちに中止することを強く求めた。

にもかかわらず、米国はわれわれと国際社会の正当な要求を重ねて無視しながら朝鮮半島と地域の情勢をこれ以上袖手傍観できない極点に追い込んでいる。

国家の自主権と安全がこれ以上許せない水準まで脅かされている重大な事態発展に対処してわが党と共和国政府は、敵対勢力の軍事的威嚇を徹底的に制圧し、朝鮮半島と地域の平和と安全を守るための断固かつ決定的な措置を講じざるを得なくなった。

われわれの核戦力は、決して広告するために存在するものではない。

国家防衛の聖なる使命を果たすために必要な場合、いつでも使用され、危険に拡大

される衝突が起こるなら、戦略的企図に従って任意の時刻に先制的に使用できるものである。

今回に行われた大陸間弾道ミサイル「火星砲-17」型発射訓練は、それに対する明白な示唆である。

われわれは、米国とその追随勢力の無謀な軍事的挑発策動を引き続き圧倒的な力で制圧していく。

朝鮮民主主義人民共和国核戦力政策法令には、わが国家を相手に加わる外部の軍事的威嚇と攻撃に対応するための異なる状況での核兵器使用原則と条件が明白に規定されている。

誰であれ、共和国の自主権と安全を侵害しようとするなら、われわれの核戦力はこの法令に従って断固対応するであろう。

もし、米国と南朝鮮の危険極まりない軍事的挑発の動きが今のように引き続き傍観視されるなら、双方の膨大な武力が先鋭に密集、対峙している朝鮮半島地域で激烈な物理的衝突が発生しないという保証はどこにもない。

このような衝突が現実化する場合、地域の安定はもちろん、米国の安保危機も收拾のつかない破局的な局面に置かれるようになるであろう。

米国は、われわれに反対する無謀な軍事的挑発と戦争演習を直ちに中止すべきである。

オラトリオ「鳳の花蔓」について 沖縄はかつて武器を持たず、アジア各国との平和な交易で栄えた「琉球王国」の時代があった。その後、薩摩藩、日本軍、そして悲惨な沖縄戦を経て戦後はアメリカによって支配され、1972年に本土復帰を果たすも、いまだに平和な島に返ることが許されずにいる。

この曲は、沖縄の中部、東シナ海に面した人口4万人の読谷村での実話に基づく合唱曲。山内徳信村長を先頭に、村民たちが米軍に取り上げられた土地を取り戻し、日本国憲法に基づき文化の村づくりをめざす粘り強い闘いが描かれている。

神奈川の詩人・佐々木淑子さんと2001年から構想・台本作りをすすめ、20年の歳月を要して、ようやく作品として上演の運びに。当初、オペラ仕立て、2時間、30曲近くの曲がありましたが、形式を変更、さらに描く内容を絞り込んで45分～60分の舞台構想に。（藤村）

藤村記一郎
作品コンサート 70
オラトリオ
おとり
はなづる
鳳の花蔓

日時：2023年5月5日(祝・金) 15:30開場 16:00開演

会場：東海市芸術劇場 大ホール 名鉄「太田川」駅下車すぐ

名古屋駅から中部国際空港・河和・内海方面へ特急で15分

全席指定：S席：2500円 A席：2000円（障がい者・高校生以下はそれぞれ500円引）

主催：名古屋青年合唱団 問い合わせ Tel:052-361-8645 □ meisei@wine.ocn.ne.jp

後援：名古屋市教育委員会 愛知県教育委員会 愛知のうたごえ協議会

始まった」だの、「膺懲する」だのと言い、極度の対決狂気を鼓吹した。

朝鮮半島と地域の軍事・政治情勢がいつそう危うくなった重大な状況にもかかわらず、米国は6日、またもや核戦略爆撃機B52を出動させて5回目になる連合空中訓練を繰り広げたのに続けて13日からは大規模の米国南朝鮮合同軍事演習「フリーダム・シールド」を強行した。

現実には、朝鮮半島における核戦争勃発の危険が仮想的な段階から実践的な段階へ移行しているということを明白に示している。

米国がかいらいと結託して繰り広げている全ての軍事演習は、われわれとの全面戦争を想定した挑発的な北侵実動演習、核予備戦争であるということにその重大さがある。

「平壤占領」を狙った「双龍」連合上陸訓練だけを見ても5年間中止されたものを復活させたばかりでなく、その規模と範囲も歴代最大の水準で繰り広げると公然と言い立てている。

米帝が自分らの戦争演習に「防御」の外皮をかぶらせているが、それは黒白を転倒した破廉恥な詭弁(きべん)である。

昨年はもちろん、今年も朝鮮半島と周辺地域に時を構わず引き込んでいる核戦略爆撃機B52Hと超音速戦略爆撃機B1B、原子力空母と核攻撃潜水艦、F35ステルス戦闘機が防御的目的ではなく、純然たる戦略的打撃任務を遂行する最も攻撃的な軍事装備であるということは米国も否認できないであろう。

朝鮮半島に対する米核戦略資産の恒常的な展開と「政権の終焉(しゅうえん)」、「斬首作戦」、「平壤占領」を目標にした戦争シナリオに従って強行される特殊部隊の降下浸透訓練と奇襲上陸および進撃訓練などが「防御」的なものと信じる人はこの世にいない。

現在、敵対勢力は危険極まりない軍事的冒険に執着する一方、ありもしない「人権問題」にまでかこつけて反人倫的かつ不法非道な制裁策動でわが共和国を孤立・圧殺しようと悪辣(あくらつ)に策動している。

米国とその追随勢力は、国連をはじめと

する国際舞台で共和国を「悪魔化」するためにあらゆる「脅威」説をつくり上げて流しており、わが人民の日常生活に切実な物品に「ぜいたく品」のような荒唐無稽なレッテルを張り付けてわが境内にたった一点も入られないようにしようと卑劣に振る舞っている。

核問題をもっては、これ以上われわれを国際的に孤立させるのが難しくなると、米国は烏合の衆の追随勢力をかき集めて国際舞台で反共和国謀略策動に執着している。

米国をはじめとする敵対勢力の反共和国圧殺策動による否定的影響は決して、朝鮮半島にのみ限られていない。

現在、米国は地域の軍事戦略的覇権維持を目的とする「インド太平洋戦略」履行の看板の下でかいらいと日本の懸念すべき軍備増強行為を口を極めてあおり立てながら朝鮮半島と北東アジア地域の軍事的均衡を米国主導の同盟体制に有利に転換させようと各方面から策動している。

米国は、アジア太平洋地域に「アジア版NATO」のような新しい軍事ブロックを樹立するのに没頭しながら「AUKUS(オーカス)」など追随国の軍事力を包括する「統合抑止力」を構築することで地域大国に対する包囲網を形成し、絶えず孤立・弱体化させて自分らの覇権的目的を達成しようとしている。

かいらいの「高威力弾道ミサイル」開発・導入、軍事偵察衛星の打ち上げと原潜保有企図、日本の「敵基地攻撃能力」確保のための「トマホーク」巡航ミサイルの導入と極超音速ミサイル開発策動は、米国とその追随勢力の軍備増強の動きが許せない危険ラインを超えているということを示している。

こんにち、朝鮮半島は米国とその追随勢力のヒステリックな軍事的膨張策動によって世界最大の火薬庫、戦争演習場に転変している。

分裂と対決をあおり立て、安定と発展を妨げる米国の覇権追求によって地域の安保環境が危うくなり、国際的な平和と安全の根幹も甚しぐ揺れているのは周知の事実である。

万事には原因があり、理由があるものである。

朝鮮民主主義人民共和国
北朝鮮からの
通信



爆発前夜に至った朝鮮半島情勢の根源と関連して2023年3月17日、「労働新聞」に掲載された論評員の文をお送りいたします。

朝鮮対外文化連絡協会

爆発前夜に至った朝鮮半島情勢の根源を論ず

朝鮮半島の情勢が統制不能の危険極まりない状況へと刻一刻突っ走っている。

戦争勃発の臨界点に至った核大国間の先鋭な対峙を世界が深刻な懸念の中で注視している。

この重大な事態は、全的に米国とその追従勢力の無分別で横暴な反共和国圧殺狂気によって招かれたものである。

周知のように、わが共和国は今年の年頭から経済建設と人民生活の向上で新たな発展と進展を遂げようとする一念から朝鮮半島と地域の軍事的緊張を緩和し、平和と安定を維持することに全力を集中してきた。

しかし、米国をはじめとする敵対勢力は昨年到现在もわが国家の自主権と安全・利益を乱暴に侵害する憂慮すべき敵対行為にしつこく執着しており、その重大さと危険性はこれ以上許せない域に至っている。

去る1月、かいらい地域を訪れた米国防長官のオースティンは、わが国家に対する核兵器使用企図をはばかることなくさらけ出しながら、5世代ステルス戦闘機と空母のような戦略資産をより多く展開すると力説したし、同族対決に狂った尹錫悦かいらい逆徒も地下防空壕にひきこもって「備え態勢の確立」、「膺懲(ようちょう)」について言い散らした。

虚勢と空威張りに浮ついた好戦狂らは、今年の前半期に過去の「フォール・イーグル」合同軍事演習の水準以上の度合い強い合同軍事演習をおおよそ20余回も行うと公表し、われわれに対する浸透および戦略的施設と主要中核標的に対する合同打撃訓練など火薬のにおいが漂う北侵戦争演習をヒステリックに

繰り広げた。

拡張抑止力の常時駐屯をうんぬんした通りに米国は、2月に入ってかいらい地域にB1B核戦略爆撃機、F22、F35Bなどのステルス戦闘機をはじめ中核空中戦略兵器を投入してかいらいと朝鮮西海の上空でわれわれを狙った数回にわたる連合空中訓練を強行した。

特に、米帝は去る2月下旬、かいらいを米国に引き込んでわれわれに対する核先制攻撃を既定事実化した「拡張抑止運用演習」というものを開始して、今後も朝鮮半島に核戦略資産を恒常的に展開すると言いつた。

このような無分別な軍事的対決妄動と敵対行為は3月に入って朝鮮半島地域情勢を爆発寸前の危険ラインへ追い込んだ。

米国は、われわれに対する軍事的圧迫を増大させる腹黒い下心をもって米海軍の主要戦略資産である原子力潜水艦、イージス駆逐艦を連続かいらい地域に急派した。

去る1日、米海軍の最新型ミサイル追跡艦「ハワード・0・ローレンツェン」を朝鮮東海に投入してRC135Sをはじめとする偵察資産で偵察行為を働いていた米国とかいらい好戦狂らは3日、戦略爆撃機B1Bと「空の暗殺者」として悪名をとどろかしている無人戦闘攻撃機MQ9リーパーなど各種の戦略装備を動員した連合空中訓練を朝鮮西海の上空で今年に入って4回目も繰り広げた。

一方、かいらい参謀本部議長は上司と結託してわが共和国の戦略的拠点に対する奇襲打撃を狙った「斬首作戦」が繰り広げられる特殊作戦訓練場、前線近隣地帯のかいらい軍部隊を歩き回りながら、「敵の挑発はすでに

地元 グループ紙誌 「地元」 拝見

いま面白い市民運動の情報誌

公開質問状を送る
○「わが街の革新懇」平和・民主主義・暮らしを守る緑区懇談会／西村秀一
ほか

● なごや市職

(第三七三三号) 二〇二三年三月十一・十二日 発行 名古屋市職員労働組合／名古屋市中区三の丸
○23春闘勝利！ 3・2中央決起行動／賃金上げろ！ 全国一律最賃制の確立を！
○コロナ禍で見えてきた地域・自治体の重要性／地方選の課題を考える「市民講座」
○豊かな保育のためにもう一人／自治体保育労働者全国集会
ほか

● 追伸

(第十四号) 二〇二三・二 発行 追伸舎／名古屋市中区大須
○「エッセイ」帰郷／劉永昇
○「小説」枇杷の花／山下智恵子
○「小説」わたしのポラリスをさがして／古嶋 和
ほか

● 革新・愛知の会

(第三三四・三三三二号) 二〇二三・三・十 発行 平和・民主・革新の日本をめざす愛知の会／名古屋熱田区

○「インタビュー」藤川誠二さん／命と安全が最優先／いま、声をあげるとき／福島原発事故の教訓を踏みにじる大転換
○名古屋市議・愛知県議(現職)へ／旧統一協会について

● 平和新聞・愛知版

(二〇二三・三・一五) 編集 愛知県平和委員会／名古屋市中東区
○全国高校生平和集会IN沖縄／愛知平ゼミツアーで10人参加

○日本原水協全国集会分科会報告／非核平和の日本とアジア
○被災六九年3・1ピキニデ集合会／ピキニ水爆被災したたかいは終わらない
ほか

● NIC NEWS

(第四一四号) 二〇二三・二 / 三 発行 名古屋国際センター／名古屋市中村区
○自分らしく生きていく。／私たちが生きる「今」
○自分を知ることから地球市民意識がはじまる
○自分を知り、「自分軸」を持つために
ほか

● 第三四回 平和展 『真宗大谷派の海外侵出』

『満州開教』(前編)
(二〇二三・三・十七) 発行 真宗大谷は名古屋教区教化センター／名古屋市中区桶
○「満州開教」について
○「満州開教」のはじまり

● 草の根

(二〇二三・三・六) 発行 原水爆禁止愛知県協議会／名古屋市中東区
○署名の輪を広げ原水爆禁止運動の推進を／定期総会
○ウクライナ侵略一年／一刻も早く戦争をやめさせよう
○二〇二三年3・1ピキニデ代表団会議
ほか

● 愛労連

(第三五六号) 二〇二三・三 発行 愛知県労働組合総連合／名古屋熱田区
○生活まもる大幅賃上げ実現／労働者全体の団結で職場・地域から賃上げの風起こそう
○大増税・社会保障の削減につながる大軍拡許さない／市民のための政治「へ」人ひとり
が声上げよう
○組合つぶし攻撃とのたたかいは裁判も愛労委も／平田英友
ほか

【表紙】三浦雅子